



太田 洋 × 西村秀之 Here We Go! 特別対談

『Here We Go!』（以下、HWG）のストーリーには、生徒の心をつかんで離さないリアルな表現や展開が詰まっています。子どもたちが自分自身の学びをデザインしていく「自律的学習者」の育成に向けて、教科書やストーリーをどのように活用していけばよいのでしょうか。編集委員の太田洋先生と西村秀之先生に語り合っていました。

子どもたちの 心に響く、 ストーリーの魅力

西村 HWGの特徴は、まず「子どもたちが教科書のセリフを真似する」ところだと思います。それだけ言葉が子どもたちに入っているんですね。

太田 その場面で学んだことを「ここでも使えるかな」と子どもたちが考えることができる。理解して活用したくなるということは、学び方としてとてもよいですね。そうしたくなる教科書がHWGです。そんな子どもたちの姿を見て、先生も一緒に楽しんでくれているので、どんどん話がつながっていく。

西村 小学校ではショウタというキャラクターが大人気で、彼のセリフを、子どもたちが日常会話でなりきって話しているシーンを見ます。中学生だけではなく小学生でもそんな様子が見られる。それだけ子どもたちがキャラクターに共感したり、自己投影したりしているのではないかなと思います。

太田 まさにそれです。ストーリーとキャラクターが魅力的だと、繰り返し学びたくなるんですね。言葉の学びは繰り返しが大切です。教科書のストーリーを単に何度も聞くのではなく、いろいろな活動を通して、「結果的に何度も聞いてしまった」、「聞いているうちに、だんだんわかっていくようになった」ということが、

とても大切だと私は思っています。中学校のHWGでは、本文音声に加えて、アニメと実写ドラマの両方が収録されていますが、どちらもあることで学習のバリエーションが広がりますよね。ある中学校の先生は、「子どもたちが授業をがんばったご褒美に実写ドラマを見せている」と言っていました。ご褒美って、「そんなもの、いつでも見られるのでは」と私は思っていますが（笑）。

西村 実写ドラマは多くの中学校でいちばんの人気コンテンツですよ。3年生のUnit 2「Our School Trip（修学旅行）」で、コウタが、バスにカメラを忘れたティナのために走るじゃないですか。実写ドラマでは「いよいよ走るぞ!」という場面で画面が切り替わってしまうので、子どもたちが「ああ…」とショックを受けていたのが印象的でした。アニメと実写ドラマを変えているので、それがまたおもしろい。実写ドラマは、そんな遊び心がたくさんあります。

太田 自分と同じ歳のキャラクターたち



3年生Unit 2「Our School Trip」
コウタがティナのために走るシーン

が、意見をきちんと持っているところが惹きつけられるのだと思います。修学旅行や合唱コンクール、部活などの様々な場面で、また、AIや環境問題などの様々な内容について、自分の意見を述べています。例えば、3年生のUnit 4「AI Technology and Language」では「AIについて自分の意見を書く」ことがゴールになっています。ストーリーの中で、キャラクターがそれぞれの意見を、それぞれの立場から発言している。ここでは、「では、あなたはと思う？」と教科書を活用して子どもたちに投げかけることができますよね。いきなり“What do you think?”と問われても、答えるのは難しい。そこで、「じゃあ自分の意見に近いのは誰？」ときくことで、答えやすくなっています。

西村 HWGは、キャラクターたちの会話を通して社会的な話題について自然に学んでいけますよね。あたかも友達が言ってい

るような意見を聞きながら、AIやSDGsなどに触れていくので、題材が自分にとって近く感じる。それはやはりHWGのよさですね。子どもたちは、学校や日常生活、社会問題についてキャラクターたちと語りながら、一緒に成長していくことができる。

太田 『COLUMBUS 21』※1のときから光村図書がずっと大切にしてきたのは、まさにキャラクターです。なぜキャラクターを作ったか。それは「目的・場面・状況」、「この場面だから、このようなことを思っている」という、必然性が大切だからです。ただ聞かせるだけではなく、その子の気持ちから意味を考えられるように、これまでずっと教科書を編集してきました。

西村 だから、光村図書のストーリーは言葉と心が離れない。「言葉と心が常に一緒にになっている」というのがまさに『COLUMBUS 21』からの流れなんですね。

太田 はい。子どもたちが、キャラクターに本当に興味を持ってくれる。キャラクターがいるかどうかで、子どもたちの学びへの集中度が全く変わってきます。それを生かした活動が、「なりきりリスニング」と「なりきりスピーキング」ですね。単なる音読ではない。初めは5ラウンド※2の活動の一つとしてやっていたものですが、今は全国でいろいろな先生方が取り組んでいますよね。

西村 「5ラウンド」、商標登録しておけばよかったです（笑）。

※1 『COLUMBUS 21』…HWGの前身となった、弊社中学校英語教科書。
※2 5ラウンド…1年間に教科書を5周する指導法。詳細はp.8～12「全国へ広がるラウンドシステム」へ

「なりきりリスニング」・「なりきりスピーキング」で得られる学習効果

太田 なぜ、「なりきり」を考えたのでしょうか。

西村 子どもたちが聞きたくなる仕掛けを作ったからです。「なりきりリスニング」は、自分のなりきりたいキャラクターを選ぶことがポイントです。ただ漠然と聞くのではなく、自分でキャラクターを選び、集中して聞くことで、意味だけでなく発言したキャラクターの気持ちを意識することができる。そのような効果を期待して取り組み始めました。子どもたちがキャラクターを選ぶときには、明らかに自分の好き嫌いが出てきます。ティナ派とか、ハジン派とか（笑）。キャラクターが立っているからこそ、こういった活動が効果的になりますね。

太田 そうですね。意味や気持ちを考えながら活動することはとても大切です。聞くことは、もちろん意味や気持ちを考える活動なのですが、さらに大切なのは、音読（読むこと）の際に意味や気持ちを考えることです。そこで、「なりきりスピーキング」が効果的なのだと思いますが、西村先生はどのように考えて取り組んでいたのですか。

西村 「なりきりスピーキング」では、まさに意味や気持ちを考えさせることを意図



おおた ひろし
太田 洋

東京家政大学教授
東京都生まれ。東京都の中学校、東京学芸大学附属世田谷中学校教諭、駒沢女子大学教授を経て、2014年より現職。光村図書小学校・中学校英語教科書『Here We Go!』編集委員。主な著書に、『英語の授業が変わる 50のポイント』（光村図書出版）、『これからの英語授業にひと工夫』（共著・大修館書店）などがある。

対談に登場する主なキャラクター



ショウタ

小学校教科書に登場。ひょうきん者で、おおらかで、食いしん坊。みんなを明るく盛り上げる存在。



コウタ

中学校教科書に登場。トランペットが得意。自分の意見を言うのはちょっと苦手。



ティナ

中学校教科書に登場。アメリカ出身。快活で責任感が強い。チャレンジ精神旺盛だが、頑張りすぎて疲れてしまうことも。

HWGのストーリーを彩る個性豊かなキャラクターの一覧はこちらからダウンロードいただけます。好きな食べ物や苦手なもの、豆知識など、ここでしか見られない情報が盛りだくさんです。ぜひ授業でご利用ください。





次代の担い手として、 「自律的学習者」を 育成するために

西村 子どもたちを見ていると、HWGはいわゆる「教科書」という捉えではなく、お気に入りの本という感覚なのではないかと思います。続きが気になるから、授業を待たず読みたくなる。

太田 そうですね。HWGには、これまで話してきたように、キャラクター性やストーリー性を生かしたさまざまな仕掛けがあり、だから「なりきり」などのいろいろな活動ができます。結果、言葉と意味が重なって、自然と言葉が自分のものになる。授業でのそうした体験を通して、子どもたちは学び方を学んでいきます。令和7年度版の教科書には、「英語の学び方ガイド」というコーナーがあります。これは、「リスニングやスピーキングの学び方は、どのようにしたらいいですか」という子どもたちのよくある質問に対して、「教科書の真似をしてみるのはいかがですか」とか、「基本文を自分のことに置き換えて話をしてみましょう」といった学び方の例やコツを提示したものです。これから英語教育で大切なのは、「自律的学習者」を育成することではないでしょうか。子どもが自分で判断して、自身の学びをデザインできることが大切です。

西村 子どもたちが教科書に興味がなかったら、教科書と学び方は乖離したものに

していました。全文を話せなくてよくて、1文だけでも、なりきって話す。キャラクターになりきるために、子どもたちはより注意して聞きますよね。そこで意味と気持ちがしっかり意識されます。だから全部を言えなくても構わないと考えています。意味と気持ちを考えながら聞いた後は、子どもたちは「そのセリフを言いたい!」という気持ちになるので、その1文を待って、一生懸命に音読します。

太田 ストーリーがあるからこそ、いわゆる「空読み」をしなくなるんですよね。「音読は大切だから、何度も練習しなければならない。」それが音読のいちばん危険な落とし穴です。何度練習したとしても、意味や気持ちを考えず音読している「空読み」は、英語の音とその意味が結びつきません。そうではなく、そのキャラクターになりきって音読をすることが、意味を考えることにつながるのではないかと、私は思います。

なってしまう。読み物のように、続きが気になるから自らページをめくりたくなる。学びたくなる。さらに、自主学習で困ったりつまづいたりしたとき、それを支えるために学び方ガイドがあるといった、2段階になっているんですね。

太田 そうです。だから授業での学びをきっかけに、家でも試してみる。そのサイクルが「**学び方を子どもに委ねる**」ことにつながります。そして、「学びを委ねる」ためには、先生方の具体的な支援や仕掛けといった、学び方のサポートが必要不可欠です。ぜひ、先生方も教科書のストーリーや学び方ガイドを活用し、子どもたちが自律的学習者となるために後押しをしていたきたいなと思います。

西村 我々は、自律した学習者を育てるた



めの第一歩となる教科書を、これからも考え続けたいですね。



英語の学び方ガイド

各学年の巻末に配置した「英語の学び方ガイド」。「音読をするときに、何を意識すればいいの?」「自分で英語の文を作るのが苦手です」といった、生徒のよくある学び方に関する質問や悩みに、具体的に答えます。

